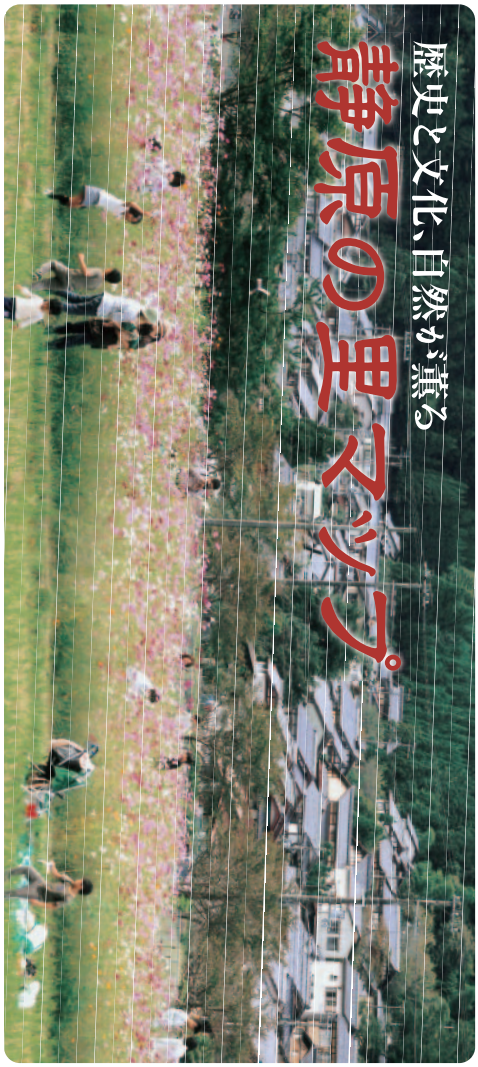
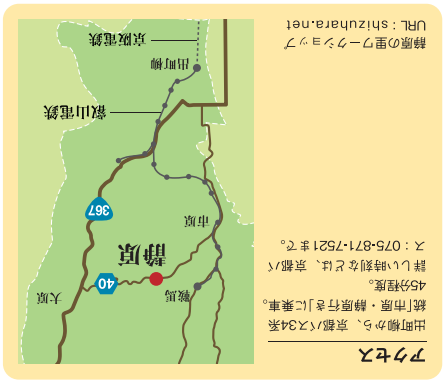
歴史と文化、自然が薫る 静原の里マップ。



静原について

静原は、農家や建築に携わる人の多い、150世帯・500人規模の静かで美しい里です。春ははなの蕾、夏は緑の山々、秋の紅葉、冬は雪景色と自然豊かな環境の中で、住む人の日々の暮らしがあります。

明治22年まで「静原村」として変容郡に属していましたが、その年の市町村制施行で、隣接する市原村・野中村と合併して「静市野村」になりました。昭和24年に、京都市左京区に編入して「静市静原町」となり現在に至ります。



企画・制作：静原の里マップ／企画運営委員会
京都芸術大学 佐々木研究室
企画協力：KOTO DESIGN Inc.
発行・お問合せ：左京区役所まちづくり推進課 075-702-1029
発行日：平成24年3月 京都市印刷物第23482号

二十四節気で見

11 霜月

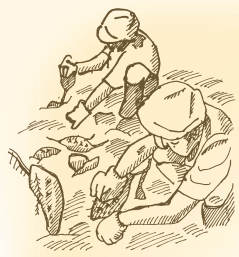
●周辺の山々が色とりどりに装いだす頃になると、秋野菜の収穫時期を迎えます。
●紅葉の見頃は11月下旬〜12月初旬。

お火炊き祭

秋季礼祭

12

●秋から冬にかけては、稲品づくりに精を出す方々
●大豆・ごぼう・金時にん菜・ネギなどの正月用の ます。
●神社の境内でも、老人会りや大杉飾り用の太いし になって作ります。



神無月

●彼岸花があぜ道の土手に顔を出し、アキアカネが山から下りて来て乱舞する光景もまた、カメラの絶好の被写体になっています。
●静原神社の境内のモミジや公園の銀杏が色づき始めると、写生を楽しまれる方も。

フユイチゴ

シジュウカラ

ムササビ

フジバカマ

タマムシ

カワラナデシコ

ヒグラシ

ミヤマカラスアゲハ

サンショウウオ

アオサギ

9 長月

●秋の収穫作業は機械化が進み楽になったとはいえ、春の田植えより気が置けない作業です。天気と熟し具合を見計らいながら、兼業農家では休日と機械の手配（刈り取りおよび乾燥作業）等の段取りに苦労します。
●機械化以前は春の田植え、秋の収穫時は「結」という共同助け合い作業が盛んに行われていました。

8 葉月

●土手に刈り残されたカンゾウや野アザミに混ざってコスモスが咲き始めると稲刈りの準備に取り掛かります。

10

●大根・白菜の種まきや植え付け等の畑野菜の作業が始まります。
●コスモスが風にそよぐ頃には、子どもたちの歓声が田畑に響き、サツマイモ掘りが始まります。
●玉ねぎ植え付け、野菜の手入れ、サトイモ等の収穫を行います。

7 文月

●農作物が害虫や病気に罹っていないか、水加減や追肥の時期はどうか等々、見回りが続きます。
7月14日の「田の虫送り」は昔ながらに盛大に行われ、カメラの絶好の被写体です。
●追肥をするには十分な水張りが必要なため、水路の補修・手入れを再度行います。
●小川や里山にヤマブキやウツギが咲き始め、渡り鳥のカッコウが初夏を告げる頃、あぜ草刈りに日々追われる季節です。
●見事に緑の絨毯を敷き詰めた水田にシロサギやアオサギがカエルを探して舞い降ります。

田の虫送り

1月		12月		11月		10月		9月		
大寒	小寒	冬至	大雪	小雪	立冬	霜降	寒露	秋分	白露	処

どんど（左義長）（一月十五日）
正月のしめ縄や門松を持ち寄り静原神社で焼却します。

初詣
元日には地元の氏神である静原神社へ参拝し、新年の家内安全・無病息災を祈願します。

お火炊き祭（十二月第一日曜）
一年間お奉りしたお札や締め縄などを燃やします。女の子による御幸持ちが行われます。この時の御供はミカンと柿です。

愛宕さん
石灯籠のある町内会（隣組）では、毎夜輪番制でロウソクを点け、町内安全を祈願します。また、年三回行われる「愛宕講」では、会場となる家に人が集まり、飲み食いをしながら親睦を深めたり、町内の事が話し合われます。

秋季礼祭（十月十日に近い日曜日）
女の子による御幸持ちが行われます。この時の御供は茹でた枝豆と栗です。

より演奏されており、太鼓を習得した高学年児童が低学年児童を指導し、その音色を絶やさないよう伝承しています。

丑（ちゅう）旧暦十二月。萌芽が生じるが、伸びきれない。（からむ）
子（し）旧暦十一月。新しい生命が種子の中に萌し始める。（ふえる）
亥（がい）旧暦十月。草木が枯れ果て、種子が閉蔵される。（とざす）
戌（じゅつ）旧暦九月。草木が枯れていく状態。（ほろぶ）
酉（ゆう）旧暦八月。果実が熟れ過ぎる状態。（ちぢむ）
申 旧